

養護教諭の健康相談をいかした情報発信と チーム支援の在り方

山本典恵¹

多様化、複雑化した子どもの心身の健康課題に対応するために、教職員が情報を共有し、チームとして支援を行うことが求められている。本研究では、教職員が多面的に生徒を理解して支援するために、既存の会議において、養護教諭が「保健室情報共有シート」を活用した情報発信を行った。この結果から、養護教諭の健康相談をいかしたチーム支援の有効性を示した。

はじめに

平成22年に文部科学省がまとめた「生徒指導提要」においては、生徒指導を進めていく上で基盤となるのは児童・生徒理解の深化を図ることであり、児童・生徒を多面的・総合的に理解していくことが重要であると示している。また、生徒指導を進めるにあたっては、学校としての協体制を築くことが大切であると述べている(文部科学省 2010)。

平成27年の中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」においては、学校が多様化・複雑化している子どもの心身の健康課題に対応していくためには、関係職員がそれぞれの役割をいかし、チームとして課題解決に取り組むことが必要であるとされている。そして、養護教諭は、児童・生徒等の健康相談において重要な役割を担っていると共に、関係職員の連携体制の中心を担っていることが挙げられている(中央教育審議会答申 2015)。

これを受け、文部科学省は、養護教諭が他の教職員や専門スタッフと連携し、様々な健康課題を抱える児童・生徒を支援するための手順等を検討し、平成29年に「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～」を報告した。その中で、児童・生徒の健康課題の早期発見・早期対応のためには、児童・生徒の心身の健康状態の変化やサイン等の情報を関係職員で速やかに共有することが大切であると報告している(文部科学省 2017)。

所属校では、今年度のグランドデザインの重点目標の一つとして「生徒支援の充実」を挙げ、目標達成のための手立てとして「情報の共有化によるチーム支援」を掲げている。しかし、日常の授業や生徒指導のみならず幅広い業務を担っている教職員が、個々の生徒の

抱える課題について、情報や見立てを共有する時間を十分に取りにくい現状がある。

先行研究では、教諭と養護教諭では、生徒の健康課題の把握に違いが見られることから、その共有のためには養護教諭からの働き掛けや、情報収集・共有の場を設定していく必要があると指摘している(齊木 2012)。また、養護教諭が他の教職員と情報共有を行う際に、養護教諭が作成するシートを用いた情報共有が有効であると検証している(城所 2014、笠原 2016)。一方で課題として、シートの書式の工夫、活用や保管の方法を考えることが必要であると指摘している(笠原 2016)。

本研究では、「養護教諭の行う健康相談とは、養護教諭の専門性と保健室の機能を活かして、あらゆる養護活動において、心身の健康と発達にかかわる問題に気づき、手当てと会話を通じて心身の安定を図るとともに問題解決に向けて相談的に対応し、関係者と連携して、子どもの自力解決や成長を支援すること」(大谷他 2016 p.22)とする。

研究の目的

本研究では、養護教諭が作成するシートを用いて情報発信を行うことにより、教職員の多面的な生徒理解が進むことを明らかにし、養護教諭の健康相談をいかしたチーム支援の有効性を検証する。

研究の内容

1 事前調査

(1) 調査 1 - a

ア 目的

チーム支援を充実させるために課題と感じていることや養護教諭が発信した情報を教職員はどのように生徒支援に活用しているのかを明らかにする。

1 中井町立中井中学校
研究分野(一人ひとりのニーズに応じた教育研究
支援教育)

イ 方法等

平成 29 年 7 月～8 月に、所属校の全教職員 30 名を対象に、選択式と自由記述による質問紙調査を行った。

ウ 結果と考察

チーム支援を充実させるために課題だと感じていることを選択肢において複数回答可で質問したところ、「生徒の抱える課題に対して、学校だけでの対応では困難である」と回答した教職員が 67%と最も多く、次いで「家庭の問題やプライバシーに関わる問題などが複雑で困難」(40%)、「専門的な知識や技術、方法について学ぶ機会がない」(37%)と回答した教職員が多かった。このことから、所属校における現状として、個々の生徒が抱える課題が複雑であり、各教職員の個別の対応には限界があると感じている教職員が多いといえる。家庭や関係機関と連携して適切な対応をしていくためにも、まずは校内において、教職員が生徒の情報を共有し、生徒を多面的に理解して、見立てていくことが必要ではないかと推察された。

養護教諭の発信する健康相談情報が、生徒支援に対してどのように有効だったのかという質問に対して、自由記述に「保健室での会話や友人との様子などから、生徒の現状を推し量ることができる」「情報を聞いていることで、授業やその他の学校生活において、気になる生徒に声掛けしたり、学級担任の様子を伝えたりすることができ、連携した指導につながった」「養護教諭が、健康相談の中で感じ取ることができたことも大事な指導ポイントとなるので、積極的に伝えてほしい」等の意見が挙げられた。養護教諭からの情報は生徒支援を行う際に役立つことが明らかになった。

(2) 調査 1 - b

ア 目的

チーム支援を行う上での情報共有に関する課題を明らかにする。

イ 方法等

平成 29 年 8 月～9 月に、経験年数及び校務分掌を考慮し、8 名の所属校教職員を対象に聞き取り調査を行った。

ウ 結果と考察

チーム支援を行う上での情報共有に関する課題として、「情報共有を行うための時間が十分に取れない」など時間のなさに関する意見と、メモや口頭による現状の情報共有の方法では「情報の積み重ねができていない」「記憶違いや伝え漏れが出てしまう」「担任など一部の教職員に情報が集まってしまうやすく、その教職員の負担が増加する」といった意見が挙げられた。このことから、情報共有のための時間的な負担を軽減し、記録を残して、記憶違いや伝え漏れを防ぐための情報発信・共有のツールとしてシートを活用することが有効ではないかと推測された。

(3) 調査 2

ア 目的

養護教諭が情報発信を行う際の工夫と課題、生徒支援に関わる会議をどのように開催しているのかを明らかにする。

イ 方法等

平成 29 年 8 月～9 月に、協力を得られた A 市と B 郡の中学校養護教諭 8 名を対象に、選択式と自由記述による質問紙調査を行った

ウ 結果と考察

養護教諭が情報発信を行う際には様々な工夫を実践しているが、一方で課題も感じているということが明らかとなった(第 1 表)。「複数の教職員に伝える」「一人で抱え込まない」等の意見が挙がり、養護教諭から情報を発信していくことを日常的に意識して行っている様子が見て取れた。また、「支援につながる情報を簡潔に伝える」等の意見から、伝える情報の整理を行っていることが分かった。

一方、養護教諭が発信すべき情報の内容を精選することや、情報発信のみならず共有する時間の確保に課題を感じていることが読み取れた。このことから、共有すべき情報について焦点化されたシート及び情報発信・共有のために既存の会議の活用が有効ではないかと推察された。

第 1 表 養護教諭が情報発信を行う際の工夫と課題

工夫	<ul style="list-style-type: none">・複数の教職員に伝える。・一人で抱え込まない。・支援につながる情報を簡潔に伝える。・身体の状態もきちんとアセスメントする。・来室した生徒の人間関係の様子も伝える。・生徒が発した言葉を伝える。・頻回来室生徒の情報等は数字を具体的に示す。・プライバシーに配慮する。
課題	<ul style="list-style-type: none">・担任と話す時間が取れない。・情報交換の場がない。・スクールカウンセラー(以下 SC という)との連携の時間が取れない。・同じ情報を伝えても教職員の受け取り方が様々である。・支援につながる情報かどうかの判断が難しい。・誰が聞いても、見ても分かる情報を伝える必要がある。

また、すべての学校において生徒支援に関わる会議を校内組織に位置付けて開催していた。このことから、どの学校でも生徒支援について話合いの時間を設定し、組織的に取り組むことを意識していると分析できた。

2 研究の仮説

養護教諭が作成した「保健室情報共有シート」(以下シートという)を活用し、既存の会議において、健康相談をいかした情報発信を行うことにより、教職員の情報共有を行う機会が増え、生徒を多面的に理解し、チームで支援することにつながる。

3 研究の概要

(1) シートの作成

事前調査の結果から、養護教諭が発信情報を精選し、効果的に情報発信・共有を行うことができるようなシートを作成した。

(2) 所属校におけるチーム支援の実践

ア 期間

平成 29 年 10 月～11 月

イ 実践内容

養護教諭が行った健康相談の中で、チーム支援が必要だと判断した事例(合計 9 事例)について、生徒指導部会においてシートを活用して情報共有を行った。

(3) 事後調査

実践後に、成果と課題を把握するため、教職員の意見を収集した。

4 シートの作成

事前調査から分かった情報共有における課題を考慮し、限られた時間の中で円滑に情報共有を行えるように、養護教諭が発信すべき情報を精選し、他の教職員からの情報を追記し、記録としても蓄積できる様式のシートを作成した(第 2 表、第 3 表、第 1 図)。

第 2 表 シートによって養護教諭が発信する情報

<ul style="list-style-type: none"> 生徒の基本情報 (欠席状況、既往歴・通院状況、家族状況 等) 背景や課題として考えられるもの (保健室での様子、保健室での対応 等) 養護教諭の見立て

第 3 表 シート作成における工夫点

<ul style="list-style-type: none"> 養護教諭からの発信情報の精選 他の教職員からの情報を追記できる欄を設定 複数の教職員で確認した支援方針、役割分担を明記できる欄を設定 支援後の振り返り時期を明記できる欄を設定 A 4 裏表に情報を書き込めるよう様式を設定
--

保健室での対応		
1. 生徒の話を開きました(約 分間: 月 日 ())		
内容	聞き取り状況	先生方への連絡
精神面(こころ)	◎・○・△	聞き取り状況評価 ◎:十分に聞き取ることができた ○:もう少し聞き取りたい △:今回は聞き取れていない
身体面(からだ)	◎・○・△	
友人関係	◎・○・△	
学習面	◎・○・△	
部活動	◎・○・△	
家庭	◎・○・△	
2. その他 ()		
背景・課題		
現時点での養護教諭の見立て		

第 1 図 保健室情報共有シート(一部抜粋)

シート活用の流れは、①チーム支援が必要な生徒について、養護教諭が健康相談から得た情報や見立てをシートに記入し、個人情報の保護に配慮した上で、関係教職員に回覧する。②回覧されたシートを確認した教職員は、追加する情報があれば、保健室以外からの

情報欄に記入する。③生徒指導部会においてシートに記載された情報を基に、支援方針と具体的な支援の手立て、教職員の役割分担を確認して、今後の支援方針欄に記入する。④支援後の振り返りを行う時期を決め、振り返り時期目安欄に記入する。⑤その後に養護教諭が行った対応を、その後の保健室での対応欄に記入する。⑥シートは職員室の鍵付き書棚にて保管し、必要な時には取り出して確認する。なお、シートを活用するにあたっては、個人情報の保護に配慮し、回覧時には専用の表紙付きバインダーを利用して手渡しすることと、鍵付き書棚にて保管することを取り決めて実践を行った。

5 所属校におけるチーム支援の実践

(1) 生徒指導部会の活用

シートで情報共有を行った事例について、複数の教職員で支援方針や役割分担等について話し合うために、生徒指導部会を活用した(第 4 表、第 5 表)。生徒指導部会で話し合われた内容は、学年会で報告され、具体的な手立てを確認した。その結果は生徒指導部会を通じて全職員で共有し、チーム支援に取り組んだ。

第 4 表 生徒指導部会

開催頻度・時間	毎週一回・約 50 分
生徒指導部会 構成メンバー	教頭
	生徒支援グループリーダー
	生徒指導主任
	各学年生徒指導担当
	養護教諭
	SC
	教育相談コーディネーター
	町教育支援センター職員

第 5 表 生徒指導部会の内容

① 各学年の生徒指導担当者から	<ul style="list-style-type: none"> 学年内の生徒指導案件 不登校及び欠席しがちな生徒の近況
② 養護教諭から	<ul style="list-style-type: none"> 保健室来室状況 月 3 日以上欠席生徒の状況 健康上の配慮を要する生徒の対応 ■保健室情報共有シートによる情報共有と支援方針の確認(※本研究の取組で追加した)
③ 町教育支援センター職員から	<ul style="list-style-type: none"> 教育支援センター通室生徒の近況
④ SC から	<ul style="list-style-type: none"> 気になる生徒の状況

既存の会議である生徒指導部会を活用することで新たな話し合いの場を設ける必要がなく、教職員の時間的な負担を軽減できるのではないかと考えた。また、管理職、SC、町教育支援センター職員等、様々な役割で生徒に関わる教職員が一堂に会して話し合うことができる場を活用することが、多面的な生徒理解を進めるために有効ではないかと推察された。

(2) 実践事例

シートを活用して養護教諭が情報発信を行い、チーム支援につながった事例について報告する。

ア 事例1

生徒Aは、対人関係のストレスから教室への入りづらさを訴えた。欠席日数が増え、登校しても保健室や別室で過ごすことが増えた。

(ア) 養護教諭からの情報発信

養護教諭は健康相談を通して、Aの抱える課題の背景を把握した。養護教諭がシートに記入した主な内容は、Aがクラスメイトとの会話の中で、自分が非難されていると感じていること、Aの思考の特徴、家庭状況である。また、養護教諭は、Aは人間関係の不安を抱えていて、居場所を求めているのではないかと見立てた。

(イ) 保健室以外からの情報

担任は、学級で過ごしている時のAの様子や周りのクラスメイトのAへの関わり等の情報をシートに記入した。担任が、養護教諭が発信した「Aがクラスメイトから非難されていると感じている」という情報について、詳しく確認したところ、Aの対人面での自信のなさを背景に、Aがクラスメイトの言動に過敏になっていることが新たに分かった。

(ウ) 今後の支援方針

支援方針を、Aの居場所づくりとしてクラスとのつながりを意識させていくこと、学校行事への参加を促し、教室復帰へのきっかけづくりをすることとし、具体的な手立てと教職員の役割分担を確認した(第6表)。

第6表 教職員の役割分担と手立て(生徒Aへの支援)

養護教諭	保健室での受容
担任	本人とクラスメイトの気持ちの代弁
	クラスの雰囲気づくり
学年職員	別室での学習保障
SC	本人・保護者との面談

Aが校内で安心して過ごせる場所を確保するため、養護教諭が保健室でAの話を受容して聞き、適切な距離感を保ちながら受け入れる。Aのクラスメイトへの不安感を解消するために、担任がクラスメイトとAの間に入ってよく話を聞き、学級経営の中でAを受け入れる雰囲気づくりを行う。学習の遅れからさらに教室に入りづらくなることを予防するため、別室登校時には学年職員が交代で欠席した分の授業の補習を行う。Aの自己理解と、保護者の子ども理解を促すためにSCが個別面談を行う。

(エ) チーム支援を行った結果

まず、Aは別室での学習が習慣化した。担任の学級での関わりによってAに声を掛けるクラスメイトが増え、Aは教室で授業を受けられる時間を徐々に増やしていった。SCとの面談を通して保護者とも連携して支援にあたり、Aは保護者と共に学校行事に参加することができた。現在ではAは教室復帰しており、時折

保健室に来室し、養護教諭に話をすることで、不安を受け止めてもらいながら学校生活を送っている。

本事例では、Aの抱える課題の背景を教職員で共有する際に、養護教諭からの情報、担任からの情報を合わせて総合的に見立てることができた。その結果、Aを多面的に理解することができ、Aの抱える教育的ニーズを的確に把握したことで、適切な支援につながることができたと考える。また、支援の手立てとして、課題となっているAの対人不安に対する支援のみでなく、学習の保障を行うことも多面的に生徒を理解することで導き出された支援だと考えられる。

イ 事例2

生徒Bは、コミュニケーションがうまく図れず、周りの生徒とトラブルを起こしてしまうことが多い。不注意な行動によるけがが多く、救急処置のために保健室へ頻回に来室していた。授業に集中できず、学習意欲の低下があった。更に、忘れ物が多く、学習用品がそろわないことで、授業への参加意欲も低下している様子が見られた。

(ア) 養護教諭からの情報発信

養護教諭は健康相談を通して、Bの抱える課題の背景を把握した。養護教諭がシートに記入して情報発信した主な内容は、保健室来室頻度や来室時の状況、保健室での関わりの中から見立てられたBの持つ衝動性やコミュニケーションの取りにくさ等についてである。

(イ) 保健室以外からの情報

担任はクラスでのBの様子やクラスメイトとの関係、家庭連絡の状況、保護者の様子をシートに記入した。学年職員はBの休み時間の過ごし方や他のクラスの生徒への関わり、学年主任はBに対して既に行っている学習支援の取組状況、教科担任は各授業でのBの様子、SCはBの発達の特性と、面談の中から分かったBと保護者との関係等の情報をそれぞれがシートに記入した。

(ウ) 今後の支援方針

支援方針を、学習意欲の低下を防ぐことと、コミュニケーションスキルを育てることとし、教職員の役割分担と具体的な手立てを確認した(第7表)。

第7表 教職員の役割分担と手立て(生徒Bへの支援)

養護教諭	コミュニケーションについての個別指導
担任	連絡帳を活用して本人と持ち物や時間割の確認
	家庭連絡・連携の窓口
学年職員	予備の筆記用具の準備
	放課後の補習
教科担任	必要な学習用品の確認を徹底
SC	面談の中でソーシャルスキルトレーニング
	本人・保護者との面談

(エ) チーム支援を行った結果

Bを見守り、直接Bに声を掛ける教職員が増えた。学習場面では支援を継続している。SCとの面談を通

し、Bの自己理解と保護者の子ども理解のガイダンスに継続して取り組んでいる。B自身の変化として、教科担任への発言や授業に取り組む姿勢などから積極的に学習したいという意欲が見られるようになった。

6 事後調査

実践に関わった教職員8名と養護教諭に、振り返りのための聞き取り調査を行った。調査の結果から読み取れた成果及び課題を以下に記す。

(1) 成果

ア シートの活用について

「情報共有のために有効だと感じた」「知らなかった情報を知ることができた」「不登校等に対して、欠席や保健室への来室が増え始める初期の時期の情報収集や情報共有に有効だと思った」「長く時間をかけて支援するためには有効だと思う」「様々な教職員の目に触れることで、様々な支援の手立てを考えることができると感じた」「シートで視覚的に確認することで、教職員の支援に対する意識を高めることができているのではないか」等の意見が挙がり、本研究で作成したシートは生徒の情報共有に有効であるという成果が得られた。特に、生徒の抱える課題の早期発見・早期対応や、継続的に支援を行うことに効果を感じている教職員が多かった。また、シートを手渡しで回覧することを通して、教職員同士が直接声を掛け合う機会が増え、新たな情報共有の場が生み出された。

イ 生徒指導部会の活用について

様々な役割を担うメンバーで構成する既存の会議を活用して情報共有の実践を行ったことについて、「生徒指導部会に管理職が出席していることで、学校全体で支援を考えていくという姿勢につながる」「教育支援センターで関わっている生徒や保護者、進路の情報等を発信することで、学校との連携がスムーズに行えている」「SCから専門的な見立てやアドバイスがもらえる」「会議で名前が挙がった生徒についてSCが教室巡回時に行動観察を行い、次の会議でフィードバックができる」等の意見が挙がった。管理職やSC等様々な役割を持つ教職員の視点を活用して情報共有を行うことで多面的に生徒を理解することができた。

また、「新たに会議を立ち上げることなく、話し合いを行うための時間が確保できた」という意見も挙がった。既存の会議を利用することで、新たに会議を立ち上げることなく、SCや町教育支援センター職員等の専門職と話し合う時間が取れたことは、多忙な学校現場で、時間の確保という点でも有効な取組であることが分かった。

さらに、「支援の役割分担や振り返りの時期を定期的に確認することで、忘れや漏れがなく支援を行うことができた」という意見から、生徒に関わる教職員の役割分担を明確にして支援を行うことで、チームによ

る適切な支援につなげることができたといえる。

ウ 養護教諭の振り返り

実践を行った養護教諭は、「シートに情報をまとめることで、自分自身が行っている健康相談について振り返ることができた」「シートに他の教職員からの情報が書き込まれることで、学級や部活動の様子など、保健室では見ることのできない生徒の様子を知ることができた」と振り返った。シートを活用して、発信すべき情報を整理することによって、養護教諭自身が行った健康相談を振り返ることができた。更に、他の教職員からの情報を記入してもらうことで、養護教諭が生徒を多面的に理解することにつながったのではないかと考える。

また、事例2では、養護教諭が、欠席状況や保健室来室状況をデータとしてまとめて示した。数値等のデータで客観的に発信することによって、養護教諭の抱えている「何となく気になる」を裏付けることとなり、養護教諭の発信する情報の信憑性を更に高めることにつながった。

(2) 課題

ア シートの活用について

「シートの回覧に時間が掛かった」「忙しくて、回ってきたシートをじっくり読んでられない時があった」「裏表の用紙では一度に全ての情報を読み取るのに不便だった。用紙サイズを大きくして表面だけにする等の工夫ができないか」等の課題が挙げられた。今後、今回作成したシートの良さを保ちながら、様式等の改訂及び回覧方法について、更に検討を重ねていく必要があると考える。また、「他の教職員からの情報があまり記入されない事例があった」という課題も挙がったが、今回の調査では、その原因までは特定できなかった。

イ 生徒指導部会の活用について

「生徒指導部会だけでは検討しきれない事例があった」という意見が挙がり、支援方針や手立てについての話し合いを行う際に、生徒指導部会だけでなく、実際には生徒の所属する学年との連携が欠かせないことが分かった。ケースによっては、チーム支援のための会議を設定する際に、生徒指導部会と学年会のどちらが中心になって動くか、また、外部の専門機関との連携をどのように行っていくのか等、教育相談コーディネーターと協力して更に検討をしていく必要があると考える。

ウ 養護教諭の振り返り

「シートで情報共有すべき事例かどうかの判断が難しかった」という意見が挙がり、どのような情報を他の教職員と共有していくとよいのかを判断するために、生徒を見立てる力など、養護教諭としてのスキルをさらに向上させていく必要があることが分かった。

研究のまとめ

1 研究の成果

養護教諭の健康相談から得られた情報をシートに記入して回覧し、そのシートに各教職員が持つ情報が追記されていくことで、教職員間で情報共有を行う機会が増え、多面的に生徒を理解することができた。更に、多面的な生徒理解を深めていくことで、生徒の抱える教育的ニーズを適切に把握し、チームによるより良い支援を行うことができた。

また、情報共有の実践後の振り返りでは、多くの教職員が既存の生徒指導部会を活用したことのメリットを挙げている。様々な役割で生徒に関わる教職員が一堂に会して、話し合いを行えたことは多面的な生徒理解を進めることに有効であった。更に、会議を活用してチーム支援における教職員の役割分担を明確にしていくことで、より適切な支援を行うことができた。

以上のことから、既存の会議において、養護教諭がシートを活用して、健康相談をいかした情報発信を行うことは、チーム支援において有効であったといえる。

2 研究の課題と今後の展望

シートの活用に関する聞き取り調査の中で、他の教職員からの情報があまり記入されない事例があったという課題が挙げられた。このことについて、記入すべき情報がなかったのか、情報を記入しにくい様式であったのか等、その原因を明らかにしていくことが必要である。

養護教諭は実践の振り返りの中で、シートで情報共有すべき事例かどうかの判断が難しかったと振り返っていた。養護教諭が健康相談を行うために、大谷らは、「単に健康相談の方法・技法を習得するだけではなく、今日の社会の状況や学校教育、さらには人間観・健康観・教育観・養護教諭観、そして養護教諭としてのアイデンティティを持つことが求められる。そのことはまさに、養護教諭としての実践力を高めることにも通じていることである」(大谷他 2016 p.136)と述べている。養護教諭はこのような姿勢で、健康相談を行い、一人ひとりの子どもを見立てる力を培っていく必要があるといえる。

本研究では、養護教諭の健康相談をいかした情報発信を軸に実践を行ったが、今後は、学校現場では、教職員の誰もがそれぞれの立場から情報の発信者となり、チーム支援のきっかけづくりをしていくことが望まれる。そのためには、教職員一人ひとりが生徒の変化やサインに気づくことができる視点を養うことが必要である。また、複雑化・多様化した心身の健康課題を抱える生徒を支援していくために、校内体制の更なる充実を図ると共に、家庭や関係機関との連携の強化に努めていきたい。

おわりに

本研究の実践の成果をいかし、今後も、養護教諭からの情報発信の実践を継続していくことで、校内のチーム支援体制の構築に寄与したい。

最後にご多忙の中、研究に協力していただいた地区中学校養護教諭の皆様、中井町立中井中学校教職員の皆様、そして県立保健福祉大学畑中高子准教授に深く感謝申し上げます。

引用文献

大谷尚子・鈴木美智子・森田光子・井出元美奈子・大原榮子・亀崎路子・斉藤ふくみ・出原嘉代子・中川裕子・松永恵・山中寿江・吉田あや子 2016 「新版 養護教諭の行う健康相談」 東山書房

参考文献

- 中央教育審議会 2015 「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf
(2017年4月取得)
- 文部科学省 2010 『生徒指導提要』教育図書
- 文部科学省 2017 『現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～』
- 笠原奈々 2016 「特別支援学校における養護教諭が発信するチーム支援について－P D C Aサイクルを活用した健康課題への支援を通して－」(平成27年度 神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告 第14集)
- 城所康子 2014 「中学校の養護教諭が行う健康相談活動を校内のチーム支援に生かすための研究－保健室来室者へのヘルスアセスメントの実践より－」(平成25年度 神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告 第12集)
- 齊木真理子 2012 「高校生の健康な発達のための効果的な校内連携による支援についての研究－保健室経営計画の活用を通して－」(平成23年度 神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告 第10集)